



編集後記

今年の冬は昨年末から1月末にかけて例年より気温が低く、1月には名古屋でも9年ぶりに11cmの積雪にみまわれ交通機関に大きな影響を与えました。

しかし、桃の節句も過ぎようやく暖かさを実感し始めていたところに、3月11日にM9.0の国内最大の地震が発生し、東北から関東にかけての広範囲で被災しました。その後メディアの情報で、建物の倒壊、巨大津波による町の消滅、多数の安否不明者の様子等、想像を絶する被害が明らかになってきました。被災地の皆様に心からのお見舞いを申し上げますと共に一刻も早い立ち直りをお祈りしながら編集後記ををまとめました。

今年度は、中部地質調査業協会が創立50周年を迎えた記念すべき年となりました。協会の役員会で地質調査業の事業量が縮小している状況の中で、記念事業を開催するか否かについて議論の結果、50年は大きな区切りでもあり当協会及び地質調査業をより広くPRすることが重要との判断で記念事業を開催することとなりました。

記念事業の主な内容としては、建通新聞での広告掲載、50周年記念式典の開催、50周年記念特集を盛り込んだ「土と岩」59号の発行に決まりました。

記念特集の内容としては、(1)50年のあゆみ、(2)創立50周年記念式典、(3)地質リスクマネジメントに関する座談会、(4)地質調査業の将来に対する思い、を記載し、あゆみには、協会の概要、活動・世相に加え、「土と岩」の50年を整理しました。

記念式典については、多数のご来賓の皆様方をお招きしての式典、リバーフロント整備センターの竹村理事長を講師に迎えた「広重で読み解く日本文明の謎」と題する記念講演、なごやかな祝賀会を掲載しています。

11月1日には、地区協会としては初めて、「地質リスクマネジメントに関する座談会」を開催しました。

出席者は地質リスク学会渡辺会長、全地連地質リスクWG岩崎委員、中部地方整備局野田企画部長、名古屋工業大学大学院中井教授、岐阜大学八島副学長をお迎えし、協会側は伊藤理事長ほか6名の理事が出席して「地質リスクを軽減しながらいかに建設に関わるトータルコストを抑えるか、また、安全・安心なインフラ整備のために地質調査業者として何が出来るのか」といったテーマでの座談会報告を掲載しています。

地質調査業の将来への思いは、協会の若手技術者5名から「地質調査業」に対する思いや将来に向けての課題を投稿していただきました。

特別企画は、「東海三県の地質と地盤～最新情報と土木地質の問題点～」を掲載しました。

この特別企画は、協会員はもとより広く地盤・地質に関わる技術者の方々にも役立つ、長くお手元に置いて頂ける

けるものを作りたいとの思いから、協会の技術者からなるワーキンググループを立ち上げ、監修を豊蔵氏(ジオ・とよくら技術士事務所)坪田氏(中部土質試験協同組合)にお願いし、事務局として相山特別委員長、長谷川技術委員長にも参加いただきました。

関係者の皆様には短期間にも関わらず、協会としても活用できる資料としてまとめて頂き、深く感謝いたします。

協会の活動紹介としては、毎年若手技術者の育成を目的として開催している「中部ミニフォーラム」の優秀論文、隔年で実施している「現場見学会(飛騨トンネル)」の参加報告をそれぞれ2題掲載しました。

また、各委員会活動は今年度の特別委員会を加えて7つの「常設委員会報告」としてご紹介しています。

今回の59号は50周年記念であり、愛知・岐阜・三重の各県支部活動についてもご紹介しています。

ホームページピックは平成12年に協会ホームページを開設して以来、昨年度の10年ぶりのリニューアル、CMSの活用や課題についてまとめています。

広告につきましては、59号は1/8サイズに変更し募集しましたが、協会員、賛助会員から多数のお申し込みを頂き大変感謝いたしております。

読者アンケートにつきましては、年々ご回答が少なく、回答率はピーク(「48号」)時の16%(回答数:100)から現在では1%(回答数:11)まで減少しています。

このため4月以降には、ホームページからもアンケートの回答が出来るように予定しています。読者の皆様からのご意見・ご要望を多数頂き今後の参考とさせていただきますので、より多くのご回答をお願いします。

最後に大変ご多忙にもかかわらずご寄稿頂きました、富田中部地方整備局長、岩立地盤工学会中部支部長、瀬古全国地質調査業協会連合会会長、加藤中部土質試験協同組合理事長に厚く御礼申し上げます。

今後ともより一層のご支援を賜りますよう重ねてお願い致します。

「土と岩」が皆様方から愛読される、中部地質調査業協会の機関誌であり続けるように努力して参りますので、今後ともご指導、ご愛顧をお願いします。

編集委員会